



第61回月例展 南方植物研究所計画100年

2022年 2月5日(土) → 3月6日(日)

内容

- ・南方植物研究所とは
- ・「上京日記」
- ・南方植物研究所のその後
- ・日光採集旅行



展示担当者

- 土永知子 (南方熊楠顕彰館学術研究員)
- 田村義也 (成城大学非常勤講師)
- 岸本昌也 (武蔵大学非常勤講師)
- 川上新一 (和歌山県立自然博物館学芸員)

休館日

- 2月7日、14～17日、21日、24日、28日



会場に展示している解説パネルと展示担当者による動画を、展示期間中、当館ホームページでも公開します。ぜひご覧ください。

南方熊楠顕彰館
MINAKATA KUMAGUSU ARCHIVES

〒646-0035 和歌山県田辺市中屋敷町36番地
10時～17時 (最終入館16時30分)
TEL : 0739-26-9909 FAX : 0739-26-9913
URL : <https://www.minakata.org>



はじめに

農学者の田中長三郎は南方植物研究所設立を企画し、熊楠を初代所長として提案しました。この計画は曲折を経て、1921（大正10）年に田中の草稿をもとに「植物研究所設立趣意書」が作成され、財団法人としての発足を目指すこととなります。熊楠は研究所開設の募金活動を開始し、翌年の1922（大正11）年には、資金集めのため毛利清雅とともに36年ぶりに上京し、約5か月間滞在しました。その様子は「上京日記」として『牟婁新報』に29回にわたって掲載されるとともに、様々な新聞でも取り上げられ、注目を集めました。この間、熊楠は日光で植物や菌類の採集活動も行います。1925（大正14）年には日本郵船株式会社大阪支店副長の矢吹義夫が、募金に協力するため熊楠の略歴を求めたことに応じて、「履歴書」と呼ばれる7.8mに渡る長文の書簡をしたためています。

今回の展示では研究所設立の経緯や実現に向けて奔走する熊楠の姿などを資料等によりご紹介します。

なお、本展の開催にあたり、田辺市立図書館より「上京日記」が掲載されている『牟婁新報』を、南方熊楠記念館より「南方植物研究所角印」を、登録有形文化財「藤岡家住宅」より「熊楠が藤岡長和に送った短冊」の画像をお借りしました。ご協力に感謝いたします。

それでは、ごゆっくりご覧ください。

2022年2月5日

南方熊楠顕彰館

【担当】

土永知子（南方熊楠顕彰館学術研究員）
田村義也（成城大学非常勤講師）
岸本昌也（武蔵大学非常勤講師）
川上新一（和歌山県立自然博物館学芸員）

【協力】

田辺市立図書館
南方熊楠記念館
登録有形文化財「藤岡家住宅」
国立科学博物館

* 南方熊楠と田中長三郎の関係については、第52回月例展 熊楠とゆかりの人びと第35回「田中長三郎」（2019年2月、川島昭夫・蔡平里・松居竜五・志村真幸担当）で詳細に紹介されました。

南方植物研究所計画の経緯

熊楠は1904（明治37）年の日露戦争の頃に田辺に住み始めた。1906（明治39）年に新種の変形菌を発見し、1909（明治42）年にスウィングルに渡米を要請されるが断り、この頃から神社合祀反対運動を展開していた。

田中長三郎と熊楠は1911（明治44）年（熊楠45歳、田中27歳）から手紙のやりとりをしている。田中は、柑橘属の分類研究で知られる農学者で、園芸学の権威であるとともに本草学にも明るく、熊楠も評価していた。1915（大正4）年、田中は再度熊楠を米国へ招請に来たスウィングルらに同行していたが、熊楠が断ったため代わりに米国に渡った。1916（大正5）年、田中は熊楠に物産博物館及び研究所を急いで設立する必要があるという手紙を送っている。

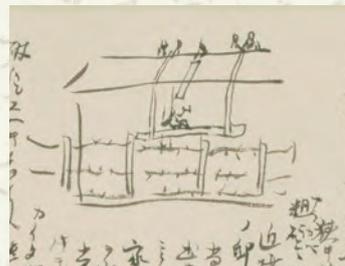
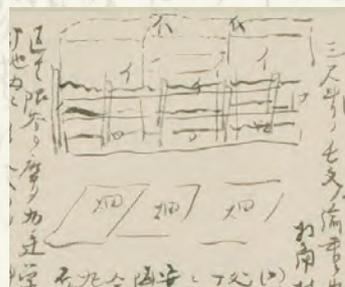
熊楠は1916年に田辺市中屋敷町の現在の熊楠邸を購入して転居し、庭で陸生の藻類にバクテリアを繁殖させ、空中窒素固定の実験を行っていた。しかし、1921年、隣家が2階建ての家屋を設置したため日照が侵害されるという事件が起こった。

このことについて県知事や友人らと話し合い、「何とかして多少世間に目立ち、世人より敬せられ保護されるような方法を講ずべし」と協議の末「植物研究所の設立」という結論が生まれ、自宅を植物研究所にするという計画が開始された。

1921年、田中は設立趣意書を起草し、6月には発起人は33人となったが、ペンツィヒ文庫購入をめぐる行き違いなどにより計画から身をひいてしまう。しかし、熊楠はこの計画実現のために1922年3月から東京に赴いて寄付を募ることになり、その記録が、牟婁新報、東京朝日新聞、読売新聞、大阪毎日新聞などの記事になって世間の注目を集めた。4月には南方植物研究所の角印が三村清三郎によってつくられた。8月までの東京滞在中に政治家や財界人との面会を重ね、また、7月から8月にかけて、日光で採集旅行も行った。その後も募金活動が継続したことは「履歴書」から読み取れる。

また、小畔四郎と上松翁とともに「粘菌三羽ガラス」のひとりであった平沼大三郎は日光へも同行し、募金活動に協力した。平沼はエングラ・プラントルの『植物学・菌学体系』やブレサドラの『菌類図譜』を購入寄贈し、巨額の基金を寄付して支援を続けた。

しかし、仕送りの停止を通告されて兄弟間のいさかいが激化し、公的な研究所としては設立をみなかった。



矢吹義夫宛書簡（履歴書）の隣家と畑の図（南方熊楠顕彰館蔵、書簡2082）

研究所募金のための東京滞在

田中長三郎が田辺を訪問し、「植物研究書設立趣意書」原稿が出来たのを承けて、熊楠は政・官・財界および言論界の有力者から支援を得る活動に乗り出していく。その頂点が、1922年3月からの上京である。滞在中熊楠は、通常の日記を付けるのとは別に、田辺の雑賀貞次郎へ通信を送り、「上京日記」と題して『牟婁新報』紙上に連載をさせている。それもまた、研究所設立へ向けた広報活動だったのだろう。

「上京日記」によれば、田辺を船で3月26日に発ち、和歌山市の常楠方で一泊したのち鉄道大阪へ出、夜行列車にて上京。東京駅に到着したのは28日午前8時過ぎであった。1886（明治19）年12月の渡米時以来36年ぶりの東京で、新橋駅に着くと思込んでいた熊楠は東京駅（1914年開業）だったので驚いたという。ロンドン時代以来の鉄道旅行で、熊楠はすし詰め夜行列車等も体験することになった。

車内満員、言語に絶するの雑踏（…）毛利氏と共に洗面場に箕踞す。（…ある人が、）予の名を雑誌どもにて知りおり、毛利氏より子細をきいて大いに気の毒がり、妻子を寝台に移し、予の坐り場所を拵えくれる。（…）予の左足の上に坐し、夜を明かす人あり。予は小便迫れども動くこと能わず。ラテン語の動詞変化などを暗誦して徹夜眠らず。
「上京日記」3月27日

田中長三郎の主導で執筆された設立趣意書には、3月時点の原案で16人の名前があったが、6月に印刷された際の「発起人」は33人となった。さらに5人の名前を熊楠が筆で書き入れた「趣意書」が現存する。この設立趣意書発起人



植物研究所設立趣意書（南方熊楠顕彰館蔵、関連1840）

には、毛利清雅や小畔四郎といった熊楠の協力者が名前を連ねているだけでなく、共立学校や東京大学予備門時代、さらに米アナーバーやロンドンで知己となった各界有力者の名前も見え、熊楠の「人脈」の広がりを見せるものである。一部をあ

げると、表のように、和歌山県政・市政、旧紀州藩以来の県有力者のみならず、中央政官界の人士に名前を並べてもらうことに成功している。この人脈を頼りに、熊楠は支援の輪を拡げていくのである。なお、原敬首相は前年11

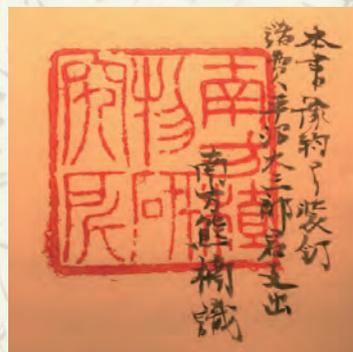
毛利清雅	牟婁新聞社長	中村啓次郎	前代議士
小原新三	和歌山県知事	岡崎邦輔	代議士 アナーバー知人
藤岡長和	和歌山県理事官 (後年知事)	大隈重信	早稲田大学創立者
遠藤慎司	和歌山市長	鎌田栄吉	慶應義塾塾長 貴族院議員
徳川頼倫	紀州徳川家当主	原敬	前首相（故人）
三浦英太郎	旧紀州藩家老家当主	土宜法龍	高野山真言宗管長 ロンドン知人

月に暗殺されたが、この年6月印刷の「趣意書」でも名前が残された。さらに、その後任となった高橋是清（首相兼蔵相、1922年6月に総辞職）は、金融行政の重鎮で、横浜正金銀行の中井芳楠とも縁の深い人物だったが、熊楠にとっては共立学校

での恩師で「明治十六年より十七年まで共立学校で予に英語を授けられたる縁あるにより往時を談じ、一笑ののち寄付金あり」（「上京日記」3月30日）と記している。熊楠はまたアナーバーでの知己小野英二郎（日興銀行副総裁）も訪問して、寄付を得ている（「上京日記」5月12日）。この機会に熊楠が面談した早稲田大学関係者は多いのだが、創立者の大隈重信は、弟常楠の恩師で、「世界一統」の命名者だった。また慶応義塾の鎌田栄吉は、徳川頼倫のロンドン留学の際の随行員で、当時熊楠と交流が盛んだった。

この上京で熊楠が獲得した支援金は、「只今集金すべて三万五千三百円ほど有之」（上松翁宛 1923年1月11日付書簡、『全集』別巻第一、90頁）に上ったという。そのなかでは、徳川頼倫侯爵1万円、三菱の岩崎小弥太男爵1万円、大阪毎日新聞の本山彦一社長5千円が多額寄附者で、別格として弟常楠が2万円を申し出ていたが、これは結局履行されなかったとあって、熊楠は常楠をひどく非難し続けることになる。なお、この1922年の時点でも多額の支援をしてくれた平沼大三郎（3年分500円）は、この後も継続的に熊楠を支援した人物の一人で、1926（昭和元）年にはその母さくより3万円の寄付があった。さらに平沼は、熊楠の洋書購入と、未製本洋書の装釘などでも協力をした。1920年代に刊行された、包括的な菌学書であるブレサドラ『菌類図譜 *Iconographia Mycologica*』も、そうした平沼の支援により購入・装釘されたもので、「南方植物研究所」の刻印が背表紙に押されたものが蔵書の中に現存している。

またこの機会に熊楠は、和歌山中学および東京時代の学友で、東京で活躍していた、木下友三郎（明治大学前学長）、中松盛雄（元特許局長）、川瀬善太郎（林学博士）、杉村広太郎（楚人冠、朝日新聞調査部員）などと旧交を温めた。この年満55歳だった熊楠と同世代の、各界で活躍する人士である。寄稿者としてゆかりの出版社である博文館（『太陽』）や政教社（『日本及日本人』）の各誌編集者も、この機会に熊楠とはじめて対面した。その中には三村清三郎と林若樹（『集古』）、北野博美（『性之研究』）、中村古峽（『変態心理』）などもいる。とくに中山太郎（博文館記者）は、金田一京助や折口信夫ら、郷土研究会員を含む在京の民俗学者を熊楠に引き合わせており、この際にニコライ・ネフスキーとも対面している。紀南田辺の熊楠を文筆のみで知り、また文通だけで接していた多数の人士が、熊楠と実際に対面した機会として、この1922年の上京は大きな意味があった。なお柳田国男は、ジュネーヴ滞在から一時帰国していたが、再会は出来なかった。



『菌類図譜 *Iconographia Mycologica*』 Vol.5
（南方熊楠顕彰館蔵、洋 441.023）
下の写真は中扉に押された印と書き入れ

さらにこの上京中に、中山太郎と折口信夫が間に入るかたちで、國學院大学での講演会が設定された。当時の学長は、東京大学予備門で同窓の芳賀矢一である。講演一般について熊楠は、「上京日記」4月22日条でも「講演などいうことは予に不向きなるも、砂画師然と畳に坐して衆人環視の内に標品を示しての座談ならば致すべし」と述べ、向いていないことを自認していたが、この件は断り切れなかったらしい。しかしその顛末は、自ら日記に記すところでは「予夕飯すませ、日本酒のみ、(車に)同乗して國學院えゆく。院の控え席にて、また日本酒のむ。講堂に芳賀博士来る。折口及び中山氏話し、予も少しく話せしが、酔いてよい加減なこととし、大酔して帰宅」(1922年5月14日付日記)というので、きちんとした話をしなかったらしい。

読書人の間では知る人ぞ知る存在だった熊楠の上京は、それなりの話題性があり、新聞報道も複数あった。竹馬の友杉村楚人冠のいた東京朝日では「大切な仕事のため乞食の真似 事業資金を集めに上京した変り者の南方熊楠氏」と報じ(3月31日、[新聞 0786])、また読売新聞は、「金策に苦しむ今仙人」と題して5回連載で熊楠を紹介している(4月18日～23日、[新聞 0793][新聞 0794][新聞 0795][新聞 0797][新聞 079])。熊楠自身は「上京日記」において、記者一人を追い返した顛末を3月30日の条に「しばらくして『東京朝日』記者中川という法学士来たり、植物学の初歩を話し聞かせという。左様のことは学士とか博士とかい^{おどろ}う輩に聞くべしと打ち返す。ずいぶんえらい見幕に駭いて早々去る」と記している。

支援依頼などでの訪問予定は2ヶ月程度でこなすことが出来、6月末にはいったん田辺帰投の相談もしていたようだが、日光への採集旅行などもあり、結局8月なかばまでの長期滞在となった。3月31日以降滞在した高田屋旅館(銀座二丁目)は、酒を出さない宿として周囲が選んだようだが、4ヶ月以上におよぶ長期滞在の間に、結局宿でも酒宴を開くようになってしまった。



東京朝日新聞「大切な仕事のため乞食の真似 事業資金を集めに上京した変り者の南方熊楠氏」(南方熊楠顕彰館蔵、新聞 0786)



読売新聞「金策に苦しむ今仙人(一) 植物研究所を造りたいと卅六年振りの上京『降りては見たが見当がつかないじゃないか』世界的学者南方熊楠氏」(南方熊楠顕彰館蔵、新聞 0793)

日光採集旅行

1909年、松村任三によって東京大学付属日光植物園が設立され、1915年には白井光太郎が史跡名勝天然記念物保存会で日光について講演会を開き、牧野富太郎は1881（明治14）年から幾度となく日光を訪れ、植物採集会をしばしば行っていた。熊楠は大学予備門在学中の1885（明治18）年7月、鉄道が宇都宮まで通った年に、野尻貞一、松下友吉二氏と「米屋旅館」に泊まり、動植物などの標本を得て「日光山紀行」を書いている。

1922年7月17日、熊楠は上松翁、平沼大三郎と中禅寺湖畔の米屋旅館に到着、18日に六鵜保が合流。26日からは熊楠も戦場ヶ原を歩いて湯元温泉「南間ホテル」に移動する。米屋旅館、南間ホテルとも当時の高名な宿である。

日記には男体山、半月山、茶ノ木平、湯滝、湯ノ湖、金精峠、菅沼、大尻などの地名があるが、熊楠はほとんど同行せず、宿で菌類の図を描いている。3名が採集してきた標本を熊楠が点検し、講釈した。日記にはイトキンポウゲ、ヒルムシロ、ヤガラなどの高等植物名が書かれ、新聞紙には車軸藻の一部のスケッチが残っている。

7月20日には牧野富太郎が女学生と米屋旅館に立ち寄ったが、不思議なことに熊楠には出会っていない。熊楠はその日の午後、東京に帰り、翌日は不快のため終日臥し、22日に米屋旅館に戻っている。そして、東京で購入したアセチレン灯は爆発して役に立たず、宿に迷惑をかけることになる。

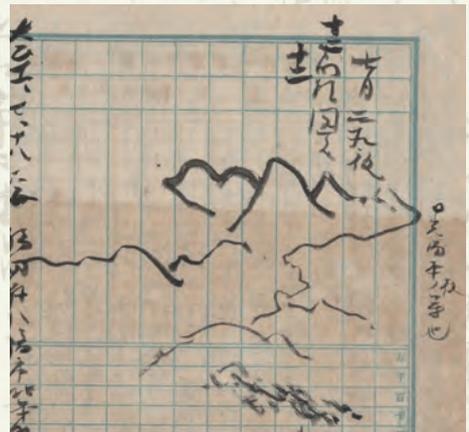
また、湯元温泉を目指して戦場ヶ原を歩いている時に、心細くなって「田辺に帰りたし」と弱音を吐いている。

「日光」と書かれた高等植物標本の束には282点が含まれ、新聞に残っている筆跡は熊楠ではないが、他の高等植物の標本同様、採集地、採集日、採集者の情報は書かれていない。日記から上松、平沼、六鵜が採集し、南方植物研究所所蔵標本になることを意識して作られたものとも言えるであろう。これらの中には葉ばかりを集めたものがあり、穿孔虫の虫害、病原菌の病斑がついた葉が多く集められているのが特徴的である。

8月7日に東京の高田屋に戻り、10日の日記には、分類群ごとの採集菌類数の表を書きつけている。



南方熊楠、上松翁、六鵜保、他2名、日光米屋旅館・写真（南方熊楠顕彰館蔵、関連0386）
前列左から六鵜、熊楠、上松



1922年の日記に描かれた日光湯元の夜景
（南方熊楠顕彰館蔵、自筆274）

日光の変形菌（粘菌）

日光での変形菌の採集標本は現在、国立科学博物館に収蔵されている。標本箱に採集年や月が記載されていないものが多いのだが、採集者や場所から、この旅行の際に採集されたものと類推される種類と標本数を以下に表記する。

ダイダイアミホコリ	1点	オジギアミホコリ	3点
オオアミホコリ	1点	スジアミホコリ	3点
アミホコリ属の一種	1点	モザイクマメホコリ(?)	2点
オオクダホコリ	2点	クダホコリ	4点
シロウツボホコリ	2点	ウツボホコリ	2点
キウツボホコリ	2点	タレウツボホコリ	1点
ヌカホコリ	2点	ハナハチノスケホコリ	1点
サビムラサキホコリ	1点	オオムラサキホコリ	2点
キンルリホコリ	2点	ツノホコリ	2点
ダイダイモジホコリ	2点	不明	6点
ニカワカタホコリ（本種は日本で未発見とされている）			2点

これらの標本については分類学的再検討が必要である。

熊楠はオオクダホコリについて、小畔四郎への7月27日付書簡で「大粘菌」で「極珍品」と称している。また、小畔への7月30日付書簡では、前日に上松が採集したコホコリ *Licea minima* を「現知日本最微の粘菌」と綴っている。場所はおそらく^{たでのうみ}蓼ノ湖周辺と思われる。しかし、現在までのところ、その標本は見つかっていない。

標本のほとんどは同行した協力者によって採集されたが、熊楠自身、変形菌や他の生き物に心躍り、彼にとって苦行である資金集めから一時解放された楽しい時間となったことであろう。



クダホコリ未熟子実体



シロウツボホコリ



ウツボホコリ



オオムラサキホコリ



ダイダイモジホコリ



ツノホコリ

ペンツィヒ文庫

田中長三郎が1921年に渡米するにあたって熊楠は、P.A. サッカルド『菌類目録 *Sylloge Fungorum*』の購入を打診していた。奇遇にも田中は、ワシントンの古書店ステッカーで、サッカルドの高弟オットー・ペンツィヒの蔵書がまとまって同書店に入荷したのに行き当たる。同書店の説明では約10,000タイトル、20,000冊、サッカルドの著作をほぼ網羅し、またリンネの著書56部、リンネ以前の植物学書378部を含んで、植物系研究所の蔵書の中核となり得るコレクションが、第一次世界大戦後という時勢もあって、ドイツからアメリカへ流出していた。売価は5,000ドル（当時のレートで約10,000円）であった。

田中は、私費で手付け金1,000ドルを払い、さらに南方常楠から2,500ドル送金という連絡を受けて書店と契約、その後熊楠や、支援者の上松翁等に盛んに督促をするが、実際には常楠から1,300ドルが送金されたのみで、それ以上の動きを熊楠とその周辺はしなかった。最終的に田中は、父の遺産を投じて、私費でこのペンツィヒ文庫を購入することになる。なお、熊楠の希望したサッカルド『菌類目録』は、熊楠が別途入手出来たらしく、現在も南方熊楠顕彰館蔵書のなかに存在する。

田中は、1923（大正12）年に帰国して、九州帝国大学に新設された園芸学講座の講師に着任、その後は宮崎高等農林学校教授との兼任や3度目の在外研究（1927～9年）などを経て、1929（昭和4）年には、台北帝国大学理学部熱帯農学第二講座（園芸学）教授に着任した。そのため、彼の個人蔵書となったペンツィヒ文庫も、台北帝大内に持ち込まれていたと思われる。台北帝大は1928（昭和3）年設立で、田中は初代図書館長を勤めた。

戦後、田中は、台北帝大の他の教授たちや、その他多数の日本人と同じく、私財を残したまま内地へ帰還することとなった。旧ペンツィヒ文庫の多くの図書は、そのまま旧台北帝大に残された。田中の教え子である蔡平里（台湾大学名誉教授）らによって、それらは近年整理され、貴重図書「田中長三郎文庫」として現台湾大学図書館で保管されている。

ただし、田中は、座右において常時利用していた一部図書を持ち帰ることが出来たらしい。帰国後、東京農業大学および大阪府立大学教授を歴任した田中が1976（昭和51）年に死去したのち、遺品の研究資料は「世界食用植物資料」として国立民族学博物館へ寄贈され、また蔵書は同館に「田中文庫」として保存されている。この「田中文庫」を調査した川島昭夫は、オットー・ペンツィヒ自筆のシェルフ・マーク（配架記号）の書き入れと、「田中長三郎亡父太七郎記念文庫」の蔵書票の貼付がされた図書が複数現存することを見出している。改装などのため表紙が失われ、そのためにペンツィヒや田中の蔵書票を留めていない図書も含めると、田中旧蔵のペンツィヒ文庫図書と認められる本は21点にのぼる、とのことである。

*参考：川島昭夫「コレクションの帰趨——オットー・ペンツィヒ、田中長三郎、南方熊楠」『書物学』10巻

財団法人化の目論見

研究所設立計画の首唱者であった田中長三郎は1921年3月末に後事を託して渡米の途に就き、主導権は熊楠周辺の協力者たちに移った。中心となったのは弟の常楠、牟婁新報社長で県会議員の毛利清雅、そして内務官僚で和歌山県勧業課長の藤岡長和であった。

研究所を財団法人とすることは元々田中構想に含まれていた。財団法人の設立には、民法の規定に従って、財団の目的や事業、資産、役員などを定めた「寄付行為」を作成して主務大臣の認可を得なくてはならない。その任に当たったのが、熊楠の周囲で最も法律に詳しい藤岡であった。藤岡は毛利と相談しながら研究所の組織や事業内容などを詰め、また理事や顧問に擬せられた人たちへの就任交渉を行った。

その結果、同年6月までに「寄付行為」案が出来上がった。熊楠が所長となり、補佐役の顧問には徳川頼倫侯爵が就く他、監事に和歌山県知事（当時は熊楠と親交のあった小原新三）を充てるという、公的色彩が濃く、社会的地位の高い人物の後援を受けた組織が構想されたのである。

あとは寄付金を順調に集め、認可を得て、裁判所に登記すれば財団法人南方植物研究所は発足したはずであった。しかし、同年6月に藤岡が兵庫県に転任、小原知事も1923年に新潟県知事に転じて県庁内に法人化推進者がいなくなったこと、寄付金をめぐり常楠とトラブルになったこと、そして熊楠の決断出来ない性格などにより、財団法人化は未完に終わってしまった。



徳川頼倫来訪・記念写真（南方熊楠顕彰館蔵、関連0381）
1921年5月27日南方邸にて撮影



日照権問題で世話になったお礼として熊楠が藤岡長和に送った短冊（登録有形文化財「藤岡家住宅」蔵）
短冊上部には「高い家を立て畑を丸で日蔭にして困らされた後ち鉄条網を張て其家の壁を塗り得ぬ様してやり先方極めて難儀に及ぶを見て俊頼朝臣の「しとねにはしふみせうとそ思ひつる」の歌から思ひ付て吟じける」とある。その下の和歌は「此くそてかたき討たそ 犬さくら」と書いてある

南方植物研究所計画のその後

和歌山県から藤岡長和と小原新三という協力者が去ったことで、熊楠およびその周辺から法人化の話は出て来なくなり、結果として財団法人南方植物研究所は創設されなかった。しかし、法人化は研究所設立の与件ではない。国から公共性、公益性が認められて法人格が付与されるにすぎず、個人が研究所を構えることとは無関係なのである。南方植物研究所が設立されたか否かは、詰まる所、熊楠の認識如何にかかわるものであった。

研究所の設立趣意書を配布して寄付金を募り、その資金で研究を続けている以上、熊楠の中では研究所は存在していたと思われる。熊楠が行う菌類、藻類、変形菌類などの研究とその成果は研究所のそれであり、継続的な研究協力者は研究所員なのであった。組織や寄付行為がないかわりに、自分を中心とする植物に関する研究の広がりや研究所は重なりあっていた。

このような個人的で曖昧な研究所が、外部に向けてその存在を示したことがあった。協力者であった毛利清雅は自著『紀州田辺名勝旧蹟 附近温泉案内』（1922年）に、田辺の名所のひとつとして「南方植物研究所」を載せた。熊楠は昭和天皇の神島臨幸を記念する石碑に、建立者として新庄村と並んで「南方研究所」の名を彫らせた（1930年）。また、宛所として「Minakata Botanical inst.」（南方植物研究所）と書かれた、アメリカの菌学者ロイドからの書簡（封筒のみ）も残っている。

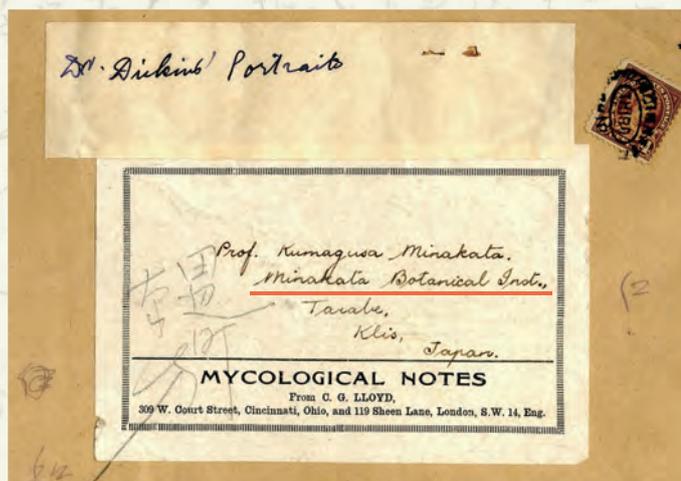
南方植物研究所は、法律上公認された存在ではなく、明確な組織はないが、個人の私設研究所として熊楠の中では設立運営され、僅かではあるが、その存在は海外にまで発信されていたのだった。



○南方植物研究所 田邊町大字中屋敷町に在り、所主は世界的百科學者として知らるゝ南方熊楠氏にして、此出資寄附者中には故原敬、故大隈重信、土宜法龍、本山彦一、徳川頼倫、三宅雪嶺、中橋徳五郎、高橋是清、鎌田榮吉、山本達雄、岡崎邦輔、中村啓次郎、堂野前種松氏等朝野の名士多し、此研究所は、蘚苔學、菌學、淡水藻、其他植物生産に関する研究結果を發表する機關なり

◎南方先生を訪ふて
木蓮が蘇鐵のそばに咲く所
碧梧桐

『紀州田辺名勝旧蹟 附近温泉案内』
(南方熊楠顕彰館蔵、和 212.11)



C. G. Lloyd (ロイド) から南方植物研究所宛・封書、赤線部分が「Minakata Botanical inst.」（南方熊楠顕彰館蔵、来簡 0151）



南方熊楠顕彰館
MINAKATA KUMAGUSU ARCHIVES

〒646-0035 和歌山県田辺市中屋敷町 36

TEL : 0739-26-9909 FAX : 0739-26-9913

URL : <https://www.minakata.org>